動乱の世から太平の世へ

戦国を乗り越えた人々のくらし

2020 年

京都府　京都文化博物館　京都府教育委員会
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

ごあいさつ

応仁・文明の乱に始まった動乱の世は約150年続き、大坂夏の陣によって終わりを告げました。その後おとずれた太平の世は、約250年もの長きにおよび、その間に日本人の生活は大きく様変わりするとともに、新しい文化も花開きました。

現在、世界の人々を魅了している日本の伝統文化の多くは、この太平の世に形づくられたと言ってもよいでしょう。

今回の展示は、今年で設立40年を迎える公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの発掘調査の成果を中心に、戦国の動乱期をのりこえた人々のくらしを、京都府内の出土品でたどるものです。

過去の歴史をふりかえり、我が国の現在と未来を考えていただく機会になりましたら幸いです。

本展の開催にあたり、貴重な文化財を御出品いただいた諸機関、御指導並びに御協力を賜りました関係者の皆様に心から厚くお礼申し上げます。

令和2年12月

京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

凡　例

1．本書は、令和2年12月12日（土）から令和3年1月31日（日）まで京都文化博物館で開催する、「動乱の世から太平の世へ－戦国を乗り越えた人々のくらし－」の展示図録である。
2．本展覧会は、京都府、京都文化博物館、京都府教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの主催で実施するものである。
3．本図録に掲載した資料は、展示品のすべてではない。また、展示の都合により、員数等が異なる場合がある。
4．本展覧会にかかる資料調査、図録作成、展示資料および写真等の借用にあたっては、次の機関から御指導・御協力を得た。
（順不同・敬称略）　真正極楽寺（真如堂）、清水寺、石清水八幡宮、大泉寺、勝興寺、米沢市上杉博物館、同志社大学歴史資料館、京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、宮津市教育委員会、舞鶴市、綾部市教育委員会、南丹市立文化博物館、京都市文化市民局、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都市考古資料館、長岡京市教育委員会、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、大山崎町歴史資料館、宇治市歴史まちづくり推進課、宇治市教育委員会、八幡市教育委員会、木津川市教育委員会
5．指定等文化財については、重要文化財は◎、市指定文化財は○、京都府暫定登録文化財は◇で示した。
6．平安京跡出土品については、現在の町名を記載した。
7．本図録の掲載写真は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影のもののほかは、上記の各機関から提供を受けた。
8．本図録の編集は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと京都文化博物館が行った。

プロローグ

動乱の世の始まり

14世紀前半に足利尊氏が開いた室町幕府は、3代将軍足利義満が南北朝を統一し、太政大臣になるなど栄華を極めます。しかし、嘉吉元（1441）年に6代将軍足利義教が赤松満祐によって暗殺される（嘉吉の乱）など、徐々に幕府の権威は衰え、守護大名が力を付けていきました。

文正2（1467）年正月（3月に応仁に改元）、管領畠山氏の家督相続を巡って争いがおき、畠山政長（東軍）が布陣する御霊神社に畠山義就（西軍）の軍勢が攻め込みます。これが応仁・文明の乱の始まりとなります。以後、8代将軍足利義政の後継者問題、有力守護間における権力闘争などを背景に、11年もの長い間、畿内を中心に戦乱は続きます。

『真如堂縁起絵巻』（所蔵：真正極楽寺（真如堂）京都文化博物館ほか『戦国時代展 A Century of Dreams』より転載）

応仁・文明の乱で焼けた相国寺の軒瓦
（相国寺旧境内：所蔵・写真提供 同志社大学歴史資料館）

応仁・文明の乱は、瞬く間に洛中、洛外に広がり、公家や武家の屋敷、寺社を焼き尽くします。真如堂本堂も打ち壊されたとされ、大永4（1524）年に描かれた『真如堂縁起絵巻』には応仁・文明の乱の様子が描かれています。

相国寺は、3代将軍足利義満により永徳2（1382）年に室町殿の東に創建された臨済宗の寺院です。ここには、応仁元（1467）年10月、東軍の陣所が置かれ、西軍の攻撃を受けて伽藍の大半が焼失します。出土した瓦は一部が高熱を受けて変色しており、戦乱で焼け落ちた建物に使われていたものと思われます。

動乱の世の都と周辺諸国

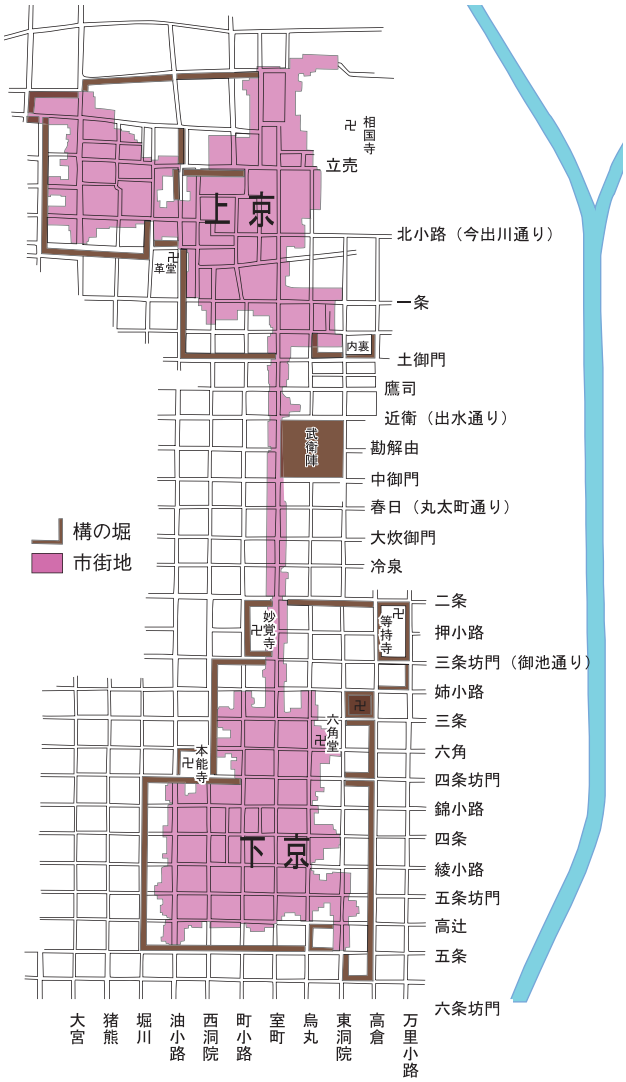
応仁・文明の乱では、武家の邸宅や神社仏閣などに陣が構えられたため、それらがほぼすべて灰燼に帰します。文明８（1476）年には、焼け残っていた室町第（花の御所）も周囲の公家屋敷とともに炎上し、将軍義政一家と、同居していた後土御門天皇まで焼けだされてしまいます。当時の様子は、『応仁記』に記された和歌「汝や知る　都は野辺の　夕雲雀　上がるを見ても落つる涙は」で知ることができます。

またこの戦いには、幕府の重臣である畿内及び周辺諸国の守護大名だけでなく、東海から九州までの遠国の守護大名も参戦していました。そのため、各地でも守護大名や国人層の間でいざこざや内紛がおこり、府内では、丹後や丹波に多数の城が築かれました。

都で戦が始まると、一部の公家は他国に疎開し、都に在住していた守護大名の一部は領国へと帰っていきました。その結果、山口（山口県）、土佐中村（高知県）、郡上八幡（岐阜県）などに都の町並みや祇園会などの文化が伝えられ、現在の「小京都」とよばれる町が誕生しました。

京都府警察本部の調査で見つかった上京の構の堀（藪之内町）

国宝『上杉本洛中洛外図屏風』（画像提供：米沢市上杉博物館）に描かれた櫓門をもつ屋敷と下京の構



戦国時代前半から後半にかけての都
（高橋康夫著『海の「京都」』掲載図をトレース）

府庁新行政棟建設予定地の調査で見つかった巨大な堀
（藪之内町）

大内義興像
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

堀周辺の復元イラスト（早川和子　画）

大内系土師器皿（藪之内町）
藪ノ内町の調査では、大内氏の地元の土師器皿が出土しました。

動乱期の都

応仁・文明の乱の後の都は、都市域が大幅に縮小し、幕府や御所を中心とした上京と商工業者が住む下京に分かれていました。武家同士や宗派間の争いなどが続く中、上京や下京の町の人々も自衛のための堀を掘り、土塁を築きました。京都府警察本部の建設に伴う藪ノ内町の調査では、上京の構（かまえ）と考えられる東西方向の大きな堀が見つかりました。また、京都府庁新行政棟の建設に伴う藪ノ内町での調査では、幅約５m、深さ約２m の巨大な堀が見つかりました。いずれも応仁の乱の後に掘られたものです。16 世紀になると、周防（すおう）（現在の山口県）の守護大名である大内義興（おおうちよしおき）が 10 代将軍足利義稙（あしかがよしたね）とともに上洛し、都で権勢を振います。また、町衆（ちょうしゅう）の手によって御霊会や祇園祭が復活し、都は復興の兆しを見せていました。

動乱期の城跡

府内には、城跡が1300か所余あり、そのほとんどが戦国時代の土造りの城です。本格的な石垣をもつ城は織田信長の勢力によって築かれ、信長は旧二条城、配下の明智光秀は丹波に亀山城、福知山城、周山城を、細川藤孝は丹後に宮津城、田辺城を築きます。丹波の八木城や須知城、山城の勝龍寺城では土造りの城に石垣を築いて改築した様子を見ることができます。

平山城跡（綾部市）
16世紀後半頃の城跡です。建物跡や14本からなる畝状竪堀群が見つかりました。戦国時代の城の圧倒的な姿を教えてくれます。

三ノ宮東城跡（京丹波町）
16世紀前半頃の城跡です。4棟の建物や5本の畝状竪堀群が見つかっています。出土遺物から、この城では日常的な生活が行われていたと考えられます。

鹿背山城跡（木津川市）
15世紀後半に興福寺の南山城での荘園支配の拠点として築城され、16世紀中頃に畝状竪堀などの防御施設が整備されています。その規模は南山城最大です。
写真提供：木津川市教育委員会

大俣城跡（舞鶴市）
16世紀後半頃の城跡です。通路を2回折り曲げた虎口（出入口）が良好に残っていました。見張り台のような城と考えられています。

八木城跡（南丹市）
丹波最大級の山城で、丹波守護代内藤氏の居城、また、内藤ジョアンゆかりの城跡です。戦国時代の終わり頃には、明智光秀が使用したようで、山裾からその時期の屋敷地跡や石垣、建物跡などが見つかりました。

勝龍寺城跡（長岡京市）
15世紀中頃に築かれ、元亀2（1571）年に細川藤孝によって改築された城で、その子忠興とその妻玉（ガラシャ）も住んでいました。石垣や瓦葺の建物跡などが見つかっています。
写真提供：長岡京市教育委員会

城でのくらし

戦国時代後半の城跡の調査では、武器や武具などのほか、食器や調理具などの生活用具も出土します。

このことから人が常駐していた山城があったことがわかります。天目茶椀や茶入・茶臼などの茶道具も含まれており、記録に残されているように、武家たちが戦の合間に茶会を通じて情報を交換していた様子もうかがえます。

色々威胴丸
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

鉄製脛当
（竹田城跡：京都市考古資料館蔵、写真提供：京都市埋蔵文化財研究所）

炭化米（山科本願寺跡：京都市考古資料館蔵、写真提供：京都市埋蔵文化財研究所）
天文元（1532）年に法華衆による焼討ちで山科本願寺が焼失した時のもの。

鉄砲玉
（田辺城跡：舞鶴市蔵）

瀬戸美濃天目茶椀
（石清水八幡宮境内瀧本坊跡：石清水八幡宮蔵）

中国製青磁椀
（宮津城跡：宮津市教育委員会蔵）

中国製青花椀
（東立売町）

天下人の国づくり

天正14（1586）年、関白豊臣秀吉は政庁として聚楽第を築城しました。聚楽第とその周囲に建てられた大名屋敷の軒先は金箔瓦で眩しく輝いていました。天正16（1588）年には後陽成天皇を迎え、天皇の前で諸大名に豊臣家への忠誠を誓わせます。また、天正18（1590）年には、寺町をはじめとする町割を再編して土地の有効活用をはかりました。翌年、洛中の治安や、鴨川の氾濫を防ぐために、都を囲う総長約22.5kmの御土居を造りました。

その後、天正20（1592）年に秀吉は伏見へ隠居するため指月伏見城を築きます。また、伏見城下を水陸交通の拠点とするため、宇治川と巨椋池に大規模な堤（太閤堤）を造りました。堤の一部は大和街道として利用され、宇治川は巨椋池に注ぐことなく伏見と淀川を結ぶ現在の姿になりました。

指月伏見城は慶長伏見地震（1596年）で倒壊し、木幡山伏見城として再建されます。この城は、関ヶ原の戦いの前哨戦で焼失しますが、半年後再建され、徳川家康、徳川秀忠、徳川家光の将軍宣下の舞台となります。

戦国時代末の都とその周辺（森島康雄氏作図に加筆）

聚楽第の本丸南面石垣（聚楽第跡）

史跡宇治川太閤堤跡（写真提供：宇治市教育委員会）

◎聚楽第跡出土金箔瓦（大名屋敷跡・両御霊町）

木瓜紋軒丸・軒平瓦（龍前町）

◇伏見城下毛利家屋敷の金箔瓦（伏見城跡）

裏葵紋軒丸瓦（小川町）

桐紋飾り瓦（藪之内町）

聚楽第周辺大名屋敷の金箔瓦

関が原の戦いの前哨戦で焼けたおにぎり
（伏見城跡：京都市考古資料館蔵
写真提供：京都市埋蔵文化財研究所）

◎印は重要文化財、◇印は京都府暫定登録文化財

太平の世の人々のくらし

応仁・文明の乱により始まった乱世は、慶長（けいちょう）20（1615）年５月の大坂夏の陣で終わりを迎え、その後250年にわたる太平の世が訪れました。慶長８（1603）年に徳川家康が開いた江戸幕府は、この年に武家諸法度、公家諸法度を定め、元号は元和（げんな）に改元されます。

社会が安定すると新田開発が積極的に行われるようになり、農業が飛躍的に発展しました。また農業だけでなく手工業の発達も目覚ましく、各地で名産品が生まれ、それらを輸送する交通網も発展しました。経済が豊かになると町人や農民も生活にゆとりができ、余暇を利用して遊山や参詣をする人々が増え、名所図会が刊行されて、おみやげも作られるようになります。文化や流通の拠点であった都や大坂などの上方では、江戸時代を通じて町人を中心に華やかな文化が育まれました。

都のショッピング街

三条通界隈の発掘調査（弁慶石町（べんけいいしちょう）、中之町（なかのちょう）、下白山町（しもしろやまちょう））では16世紀末から17世紀前半の陶磁器がたくさん出土しました（三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」：京都市指定文化財）。

1615年頃を描いた『洛中洛外図屏風』（勝興寺（しょうこうじ）本）には棚に陶磁器が並べられた店舗が描かれ、1620年代を描いた『京都図屏風』には現在の中之町の場所に「せと物や町」の記載があることから、このあたりに陶磁器を扱う店があったことがうかがえます。

出土品には、備前・信楽産の水指（みずさし）・花入（はないれ）などが多い弁慶石町、美濃産の茶椀や向付（むこうづけ）が多い中之町、信楽・伊賀、備前産などの特徴的な茶陶の割合が高い下白山町という具合にそれぞれ特徴が見られます。それぞれの店で時期や流行により、取り扱う商品が違っていたようです。

○志野織部向付
（中之町：京都市蔵）

○総織部向付
（中之町：京都市蔵）

○青織部向付
（中之町：京都市蔵）

○黒織部沓茶椀
（中之町：京都市蔵）

○鳴海織部向付
（中之町：京都市蔵）

○印は市指定文化財

○中之町の桃山茶陶（京都市蔵）

○弁慶石町の桃山茶陶（京都市蔵）

○信楽水指
（弁慶石町：京都市蔵）

○備前水指
（弁慶石町：京都市蔵）

○下白山町の桃山茶陶（京都市蔵）

○高取水指
（下白山町：京都市蔵）

○信楽・伊賀花入
（下白山町：京都市蔵）

○備前花入
（下白山町：京都市蔵）

上：江戸時代前期の町屋の基礎（藪之内町）
下：勝興寺本洛中洛外図屏風（画像提供：勝興寺）に描かれた２階建の町屋建物

江戸時代前期の町屋のくらし

江戸時代前期、京都府庁付近には、裕福な町衆である糸割符（いとわっぷ）商人が住んでいました。これまでの調査では、糸割符商人が住んでいた屋敷の一部と考えられる礎石建物跡や、屋敷の奥側に設けられたゴミ穴が見つかっています。

ゴミ穴からは、16 世紀末から 17 世紀にかけて、美濃（岐阜県）で焼かれた瀬戸黒・黄瀬戸・志野・織部などの陶器や、肥前（佐賀県）で焼かれた肥前陶器（唐津）などが出土しています。日常的に使った椀や皿などのほかに、茶道に用いられた茶椀や懐石に使われた向付などがあり、公家や武家だけでなく裕福な町衆にも茶の文化が浸透していたようです。

また、中国や朝鮮半島の焼物や、南蛮貿易に携わった糸割符商人らしい、東南アジアの焼物も出土しています。町衆の豊かな日常を彷彿（ほうふつ）とさせます。

唐津向付（藪之内町）

唐津沓茶椀（東立売町）

織部向付（藪之内町）

織部水注（大黒屋町）

黒織部沓茶椀（藪之内町）

黄瀬戸鉢（龍前町）

志野水注（寺町旧域）

志野茶椀（藪之内町）

今と変わらぬ故人への想い

京都府立鴨沂高校内の発掘調査で、寺町にあった常念寺の墓地の跡が見つかりました。337基の墓は、南北方向に列状に整然と並んでいます。土葬墓と火葬墓があり、多くは土葬墓です。墓石には、一石五輪塔、板碑、舟形碑、石仏などがあり、多いのは一石五輪塔です。刻まれている最古の年号は永禄9（1566）年、最新の年号は元禄6（1693）年です。

墓には様々なものが副葬されています。故人を追慕する気持ちは今も昔も同じで、それが子どもの場合は一入です。玩具とみられるミニチュアの器や人形などは、あの世でも遊べるように、との思いが込められているのでしょうか。そのほか特異なものに、オランダ製ガラス「ファソン・ド・ヴェニス」の破片があります。外国製のきれいなガラスは、たとえ破片でも、宝物や思い出深い品だったのでしょう。墓には故人を偲ぶ様々な思いが詰まっています。

整然と埋葬された墓地（寺町旧域）

墓地の改修で投棄された墓石（寺町旧域）

◇副葬品：陶器の人形や茶椀など（寺町旧域）

染付骨壺（寺町旧域）

陶器骨壺（寺町旧域）

◇副葬品：ままごと道具とガラスの破片など（寺町旧域）

◇印は京都府暫定登録文化財

都のうつわの移り変わり

発掘調査で出土するうつわは、捨てられた時期や使用された場所により種類が異なります。

都では、17 世紀前半は国産の瀬戸美濃と肥前の陶器、中国の磁器が主に使われます。17 世紀後半には肥前の陶器（唐津）や磁器（伊万里）が、18 世紀には肥前の磁器と京都・信楽産の陶器が主体になります。18 世紀半ば以降には全国各地でも出土する肥前波佐見（はさみ）の磁器も加わります。都という一大消費地には高級磁器から一般的な食器まで多様な器が各地から入ってきていました。

江戸時代中期（18 世紀）のうつわ（藪之内町ほか）

江戸時代後期（19 世紀）のうつわ（藪之内町ほか）

19 世紀も陶器は京都・信楽の製品、磁器は肥前系が主体ですが、瀬戸で磁器生産が始まるほか、全国各地で新たに窯が開かれ、各地の焼物が都に入るようになります。この時期には、高台が大きく口がラッパのように広がる広東（かんとん）椀や器の端が反る端反（はぞり）椀が多く作られ、遺跡の年代を考える手がかりの一つとなっています。

都には、現在の京都御苑を中心に皇族や公家が暮らしていました。いわゆる禁裏御用品とよばれる菊の御紋が描かれた器は、当時の天皇が使用した器で、使用後宮中の関係者に下賜されたようです。写真中央の器は、200 年前に太上天皇（上皇）となった光格天皇の菊紋が描かれています。これらは肥前でも限られた職人しか作れない特別な注文品でした。

御所の器（藪之内町ほか）

天明の大火の焼土と江戸時代後期の町屋建物の基礎（藪之内町）

天明の大火で焼けた陶磁器（藪之内町）
都は、しばしば大火に見舞われました。重ねて保管されていた食器が火事による高温で溶けてくっついています。

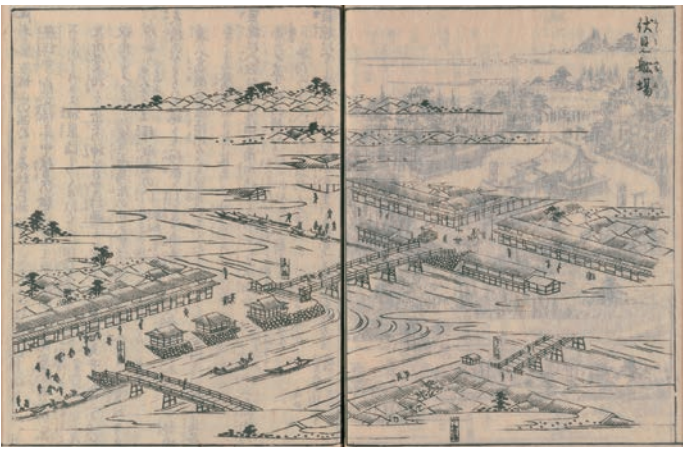
丹後・丹波・山城の様子

江戸時代、各藩主のもと城下町が整備され都市が発達しました。交易品は船に積み込まれ、丹後では海運で、丹波や山城では河川を利用した水運で各地に運ばれ、活発な交易活動が展開しました。

丹後の宮津城跡や田辺城跡（舞鶴市）、丹波の園部城跡や亀山城跡（亀岡市）などの調査で出土した陶磁器からは、当時の武家の暮らしぶりがうかがえます。

山城では、寺社の門前町や、淀・伏見など重要な交通網であった河川の近くの湊町が発達しました。『都名所図会』には当時の様子が描かれています。伏見の岡山藩邸跡で出土した荷札からは都の商人が直接藩邸に品物を納めていたことがわかりました。

三の丸南西隅の石垣（宮津城跡）
細川氏が九州に移った後、慶長５（1600）年に丹後に入った京極氏が改修しました。



伏見船場『都名所図会』巻５
（国立国会図書館デジタルアーカイブより）

荷札（伏見岡山藩邸跡）

湊町であった木津遺跡では、信楽、唐津、伊万里など複数の産地の陶磁器が出土しています。すり鉢や炮烙（ほうらく）、くらわんか茶椀などの日常雑器のほか、染付皿や青磁皿などがあります。

「木津浜図絵馬」には、多くの船や、荷を運ぶ馬や人などが描かれており、木津川の水運を利用した交易で栄える、江戸時代の木津の湊の様子を伝えています。

くらわんか茶椀（西大路町）
江戸時代中期以降の普段使いの庶民の雑器。淀川を行き交う舟の客に「く（食）らわんか」と声をかけて飲食物を販売していた小舟で使われたことから「くらわんか茶椀」と呼ばれました。

御霊神社蔵木津浜図絵馬復元レプリカ
（所蔵・写真提供：京都府立山城郷土資料館）

木津遺跡出土陶磁器（木津川市教育委員会蔵）

おしゃれは上方から！？

浮世絵や遺跡の出土品から、江戸時代の女性たちの間で流行したおしゃれの様子がうかがえます。19世紀頃、白粉（おしろい）は薄くつけて控えめにする一方で、紅を重ね塗りして下唇が玉虫色に光るようにする、「笹紅（ささべに）」と呼ばれる化粧が流行しました。それらの化粧に欠かせなかったのが「小町白粉」「小町紅」など京（みやこ）のブランド商品でした。絶世の美女としてその名を馳せた小野小町の美しさにあやかって名付けられており、小町紅の器である紅猪口（べにちょく）の外面には、販売店の名前が記されています。店の名が複数みられること、各地の城下町で出土することから当時の人気をうかがい知ることができます。

紅猪口（西大路町）
「　小町紅　　ふや町かめ茂」と商品名と店の名前が朱書されています。

横櫛（伏見岡山藩邸跡）

鬢水入（びんすい）れ（龍前町）

左：銅製かんざし（藪之内町）
右：ガラス製かんざし（常盤井殿町遺跡：同志社大学歴史資料館蔵）

方鏡（藪之内町）
携帯用の鏡。背面中央に桔梗の花があしらわれ、その左に「天下一作」の銘が入っています。

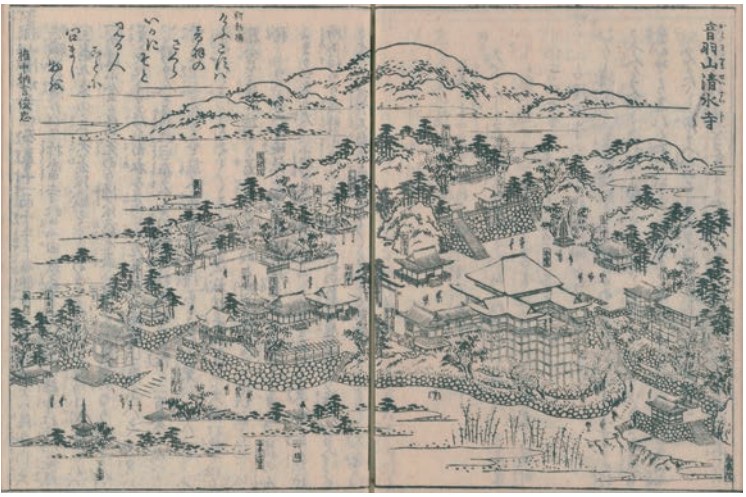
三美人図　花月庵光貞（京都府蔵・京都文化博物館管理）
下唇に紅を重ね塗りして玉虫色に光らせています。

旅とおみやげ

17 世紀前半に書かれた仮名草子『きのうはけふの物語』には、当時すでに有名寺院では拝観料に相当するものを徴収しており、それを少しでも値切ろうと試みる巡礼者の逸話があります。

17 世紀半ば頃には、西国三十三所巡礼や伊勢参りなどの旅行者が増え、神社仏閣や名所旧跡の由来・伝承に、挿絵や地図を添えた『都名所図会』『宇治名所図会』など旅行案内本が次々と出版されました。

そして旅といえばおみやげです。小町紅や嵯峨硯、伏見人形などは、都ならではのおみやげであり、旅の思い出に買い求める人々の姿は、現代のわたしたちと大きく変わらないのではないでしょうか。



音羽山清水寺『都名所図会』巻３
（国立国会図書館デジタルアーカイブより）

西国三十三所巡礼札（清水寺境内：清水寺蔵）
左端は元禄 16（1703）年に播州（現在の兵庫県）加西から参詣し奉納されたもの。右は享保 14（1729）年のもので、国宝清水寺本堂舞台下の石垣の隙間に２つ折りにして差し込まれていました。

紅猪口（園部城跡）
「小町紅　京都…」の朱書があります。藩士が都へ行った時のおみやげでしょうか。

備前焼徳利
（山家陣屋跡：綾部市教育委員会蔵）
鞆の浦産保命酒の販売用に使用されていました。通称布袋（ほてい）徳利といわれています。

嵯峨硯（公家町遺跡：京都市考古資料館蔵）
愛宕神社参拝のおみやげに売られていました。

蓮月焼（京都大学構内遺跡：京都大学蔵）
女流歌人大田垣蓮月が自作の陶器に和歌を釘彫りまたは筆書した陶器。

京みやげの１つである伏見人形は伏見街道で売られていた土人形で、全国の土人形のモデルになったといわれています。17 世紀後半から作られていたようですが、18 世紀後半から大量に生産されます。数千種類もの人形があり、多くの旅人が買って帰りました。

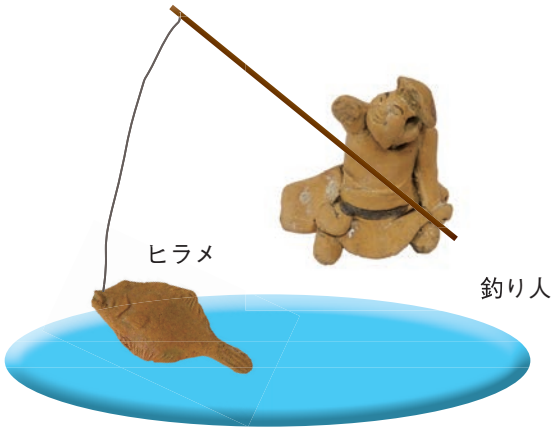
一文牛（常盤井殿町遺跡：同志社大学歴史資料館蔵）
簡単な作りで背中に丸と一が書かれています。この牛の腹の孔に米粒をつめて川に流すと瘡（くさ）（できもの）を防ぐといわれます。草（くさ）を食べる牛が皮膚の病を食べてくれるという願掛けをしたのでしょう。

狆（ちん）（左：西大路町、右：個人蔵）
今もつくられている彩色の施された狆（右）と出土した狆（左）。出土する土人形にも元々は色が塗られており、印象ががらりと変わります。狆は当時高価な憧れのペットでした。

猿回し（常盤井殿町遺跡：同志社大学歴史資料館蔵）
猿回しは大道芸の一種です。猿使いの口上や太鼓に合わせて猿が踊りや芸を披露します。狂言の演目の「靭猿（うつぼざる）」をモデルにしたのかもしれません。

おもちゃアレコレ

江戸時代の遺跡からは子どものおもちゃも出土します。独楽（こま）や双六（すごろく）のさいころ、泥めんこにままごと道具など、中には現代の子どもたちにも使い方が想像できるものもあります。また、箱庭道具とよばれる、小さな箱や盤に木や岩、橋、灯籠などを並べて情景を楽しむ、大人向けジオラマ作成の道具も出土しています。



箱庭道具（常盤井殿町遺跡：同志社大学歴史資料館蔵）

貝独楽（べいごま）（藪之内町）
バイガイの殻にロウを詰めて独楽にしたもの。

土製独楽（藪之内町）

◇ままごと道具（寺町旧域ほか）

泥めんこ（藪之内町）

◇印は京都府暫定登録文化財

◇京焼茶道具（皆具）（寺町旧域）
十六弁の菊文と若松文が染付錆絵で描かれており、禁裏御用品と推定されます。このようにまとまって出土するのは初めてです。

茶壺：鉄釉四耳壺
（宇治市街遺跡：宇治市教育委員会蔵）

抹茶と煎茶

日本における茶の歴史は、平安時代初期に遡ります。鎌倉時代になると、宋から帰国した栄西（えいさい）が抹茶法を伝え、寺院を中心に各地に広がりました。戦国時代には武家や豪商の間で普及し、千利休らにより茶の湯が完成されます。

一方、茶葉を熱湯で煎じて飲む煎茶は、戦国時代の終わり頃から町人の間にも広がり始めるようです。18世紀中頃に永谷宗円（ながたにそうえん）が緑茶製法（宇治製法）を考案し、良質の煎茶を完成させると、煎茶文化は農村部も含めて広く普及します。

赤絵煎茶椀（寺町旧域）

宜興窯（ぎこうよう）急須（藪之内町）

涼炉（りょうろ）（園部城跡）

京焼の世界

京焼は、洛中及びその周辺で焼かれた焼物です。京焼で最も古い軟質施釉陶器は、中国で作られた華南三彩の施釉技術と日本の成形技術が融合することで生まれました。楽焼は軟質施釉陶器と同じ施釉技術を使いますが、器はろくろを使わずに手づくねで成形されます。

17世紀に活躍した野々村仁清（ののむらにんせい）は、色絵技法によって初期の京焼を大成しました。仁清の京焼は、徳川将軍家に献上され、高く評価されました。絵師として著名な尾形光琳（おがたこうりん）の弟、尾形乾山（けんざん）は、京焼の伝統を引き継ぎながら、絵に文字を添える画賛形式など、大胆な意匠を生み出しました。18世紀後半には奥田頴川（おくだえいせん）が磁器生産を成功させました。19世紀になると五条坂に多くの窯が営まれ、多くの焼物が生産され青木木米（あおきもくべい）や仁阿弥道八（にんあみどうはち）（二代高橋道八）などの名工が活躍しました。

また、各地で京焼工人の技術が求められ、多くの陶工が各地に招聘（しょうへい）され、陶磁器づくりを指導しました。

◇華南三彩盤（藪之内町）
中国明代に中国南部で生産された鉛釉陶器。盤とは大皿のこと。

楽焼椀
（藪之内町）

軟質施釉陶器皿
（藪之内町）

軟質施釉陶器椀
（木津川河床遺跡：八幡市教育委員会蔵）

仁清椀（和水町）

京焼丸椀
（公家町遺跡：京都市考古資料館蔵）

京焼平椀
（公家町遺跡：京都市考古資料館蔵）

二代 乾山額皿
（京都大学構内遺跡：京都大学蔵）

「大日本周平」銘染付鉢
（藪之内町）

「道八」銘染付急須
（丹波亀山城跡）

◇印は京都府暫定登録文化財

エピローグ

再び戦乱を乗り越えて

嘉永６（1853）年、ペリー率いる米国艦隊に開国を迫られた幕府は、和親条約、修好通商条約を結び、激変の時代を迎えます。尊王攘夷運動が盛んになる中、元治元（1864）年に長州藩による京都守護職の会津藩主松平容保（まつだいらかたもり）の排除を目的とした禁門の変が起こり、流れ弾が御所の中まで飛ぶにおよびました。この戦火により通称「どんどん焼け」と呼ばれる火災が起こり、北は一条大路から南は東本願寺まで多くの町屋と社寺が焼失しました。大坂夏の陣以来 250 年ぶりの戦火であり、この後、新政府軍と旧幕府軍が争う戊辰戦争（慶応４～明治２：1868 ～ 1869 年）を経て新しい時代を迎えます。

明治維新から 150 年、日本人のくらしは大きく様変わりしましたが、戦国を経て江戸時代に培われた文化は、私たちのくらしの中に今も息づいています。今なお、陶芸をはじめとするさまざまな伝統技術や喫茶・会食などの習慣は、私たちのくらしを心豊かなものにしてくれています。

会津藩邸の食器類（藪之内町）

禁門の変の銃弾
（武衛陣町：京都府蔵・京都文化博物館管理）

禁門の変で焼けた瓦（曇華院跡：京都文化博物館蔵）
京都文化博物館の建設に伴う発掘調査では、多量の焼土の中から焼けた瓦が出土しました。

受け継がれる伝統と技

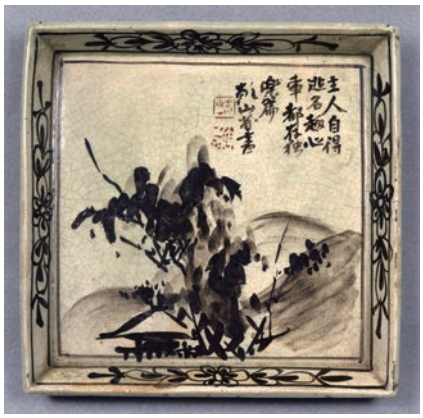
鹿背山焼は、文政10（1827）年に一条家の招聘を受けた京焼工人の助力のもと、陶土に恵まれた木津川市鹿背山で成立します。明治時代にはお茶と共に木津の港から木津川の水運を使って神戸港へ運ばれ、ヨーロッパへ輸出されるようになります。京焼も東京遷都とともに海外への需要を求め、多数輸出されました。

なお、仁清をはじめ京焼の名工たちの作品は長く愛用され、数多く現在まで伝えられています。また、その技術は伝統工芸技術として今も受け継がれています。

○鹿背山焼　松竹梅文茶入・蓋
（所蔵・写真提供：木津川市教育委員会）

○鹿背山焼　人物文急須
（所蔵・写真提供：木津川市教育委員会）

○鹿背山焼　網目文徳利・煎茶椀・小皿
（所蔵・写真提供：木津川市教育委員会）



楼閣山水図四方皿　尾形乾山
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

赤絵ねじ鉢　奥田穎川
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

白磁木瓜形水注　青木木米
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

芋頭水指　初代 高橋道八
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

金襴手急須　尾形周平
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

白磁龍文花瓶　三代 清水六兵衛
（京都府蔵・京都文化博物館管理）

○印は市指定文化財

主な遺跡の位置図

【用語解説】

畝状竪堀群　山の斜面に沿って垂直に掘り下げた堀が、複数並んで畝状に見えるもの。敵の斜面移動を困難にする。

洛中洛外図屏風　室町時代末期から江戸時代の寛永年間（1624~1644）にかけて、都の内外を一望のもとに俯瞰して、社寺・公武の邸宅、街の家並みのほか、当時の人々の生活や風俗の様子を描いた屏風。永禄初年頃（1560年代）の上杉本（国宝）、元和年間の勝興寺所蔵本（重要文化財）など数多くの名品が知られる。

構　敵の進入を防ぐために設けられた区画のこと。

土師器　粘土を材料として600~900℃で焼かれた軟質で吸水性のある土器。乳白色から赤色を呈することが多い。この時代（戦国時代～江戸時代）は、儀式や食事、明かり取りに用いられた皿が中心。

陶器　粘土を材料として1000~1300℃の高温で焼成された硬質で吸水性の少ない土器。釉薬をかけたものを陶器、かけていないものを無釉陶器、焼締陶器と呼ぶこともある。

磁器　中国では、粘土（カオリン）、日本では、陶石の粉末に粘土を加えたものを原料として釉薬をかけて1300℃以上の高温で焼かれたもの。硬質で透光性がある。日本での磁器の生産は、秀吉の朝鮮出兵に伴い朝鮮半島の陶工らによって有田で開始。

陶磁器　陶器と磁器の総称。

糸割符商人　慶長9（1604）年に幕府が定めた糸割符制度により、主要な輸入品であったポルトガル商人が扱う中国産の生糸を独占的に購入することのできた商人。堺、長崎、京都、大坂、江戸の有力町人が任命され、大きな利益を得た。

志野　16世紀後半から17世紀前半にかけて美濃（岐阜県）で生産された長石釉を掛けた乳白色の陶器。日本で初めて絵付けを可能にしたやきもの。

織部　16世紀末から17世紀前半に美濃で生産された斬新奇抜な加飾のある陶器。茶の湯宗匠であった古田織部の好みを反映したものと考えられている。

高取（焼）　福岡県下で17世紀初頭から生産されている陶器。

唐津（焼）　佐賀県西部及び長崎県北部において16世紀末から生産されている陶器。

黄瀬戸　16世紀中頃から17世紀前半にかけて美濃で生産された黄色の陶器。

染付　白色の胎土で成形した素地の上に藍青色に発色する酸化コバルトなどの絵の具で模様を絵付し、その上に透明釉をかけて高温焼成した陶磁器。中国及び朝鮮では青花と呼ぶ。

沓茶椀　口縁部から胴部にかけて楕円形に作為的に歪められた形状の茶椀。沓は、宮中で用いられた舟形の木沓に由来。

向付　会席料理において膳の向こう正面に配される和え物や酢の物、山椒味噌など簡単な料理を盛る食器。先付け鉢ともいう。

楽焼　桃山時代に初代楽長次郎が赤、黒二種の茶の湯の茶椀を製作したことに始まる低火度釉を用いた軟質の施釉陶器。

色絵技法　釉薬の上に絵付けする技法。

宜興窯　中国揚子江下流域、江蘇省宜興市にある陶器窯。「磁都」の景徳鎮に対して「陶都」の宜興と呼ばれる。

涼炉　煎茶道で使用する湯を沸かす道具の一つ。

「動乱の世から太平の世へ－戦国を乗り越えた人々のくらし－」展示図録

発行日　2020 年 12 月 12 日　　印刷　三星商事印刷株式会社

発　行　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40-3　　Tel. 075-933-3877　Fax. 075-922-1189

ホームページアドレス　http:/www.kyotofu-maibun.or.jp

【表紙写真】 国宝 上杉本洛中洛外図屏風（米沢市上杉博物館蔵）、藪之内町出土 織部向付、寺町旧域出土 京焼茶道具（皆具）

【裏表紙写真】左：西大路町出土 伏見人形狆、右：伏見人形狆（個人蔵）